



ニューヨークっ子たちにとびっきりの笑顔が戻った。

photographs: ©Koji Mizutani text: Hiroyasu Yamauchi

あの悲惨な事件から1年後の2002年9月11日。アートディレクターの水谷孝次は、ニューヨークに立っていた。この街に住む人のポートレートを撮影するためだ。被写体は、危機の最前線にいた消防士や看護師ではなく、普通の女の子たち。「あなたにとってMerryとは何ですか？」と彼女たちに問いかけ、笑顔の写真を撮り、直筆のメッセージをもらうのだ。9月11日はさんだ9日間を使って、撮影した女性は350人を超えた。

1999年から続けているアートプロジェクト「Merry」の一環として行われたものである。同じようにして水谷は、これまでに世界各地で笑顔の記録を集めてきた。一昨年には神戸での撮影も行った。

大震災で傷を負った街を少しでも元気にしたいとの思いからだ。「絶望があるから希望がある。悲劇を知っているからこそ人は幸せ、つまりMerryがわかる」と話す水谷にとって、ニューヨークで撮影をするというのはごく自然な流れだった。

そうしてできた作品による展覧会「Merry in New York」が、六本木で開かれる。会場は、ニューヨークから届いたMerryな表情で埋め尽くされるはず。「悲劇の写真は1枚あればいい。でも、こんな笑顔ならどれだけあってもいいでしょう」と、水谷は言う。全くその通り。悲劇を乗り越えてカメラの前に立った彼女たちのエネルギーを、痛いほど感じる。